

実務経験のある教員等による授業科目一覧【理容科 美容修得者】

授業科目	単位数	実務経験のある科目担当教員の氏名		
理容技術理論	4	向井美香	後藤廣一朗	原田彩花
理容実習	23	向井美香	後藤廣一朗	原田彩花
スキルアップ	7	後藤廣一朗	向井美香	
合 計	34			

授 科 目	業 名	理容技術理論				
担 教 員	当 名	向井美香 後藤廣一朗 原田彩花	学 年	1	単 位 数	4
開 講 時 期	通 年	必修・選択	必修	授 業 区 分	講 義	
実 務 経 験	向井美香・後藤廣一朗・原田彩花（理容所において理容師として勤務）					
授 業 の 概 要	優れた理容技術は、経験によってだけ得られるものではなく、合理的な方法によって実践されなければならない。理容技術理論を学ぶ目的は理容技術の習得を容易にすることである。					
授 業 の 到 達 標 目	理容技術理論を体系的に理解し、技術習得において、理論的に考えて実践できるようにすることが目標である。また、国家試験の「理容技術理論」において確実に合格できるまでの実力を身に着けることが到達目標である。					
授 業 計 画						コマ数
1.	理容技術の基礎・人体各部の名称 ・ 理容技術姿勢 ・ 理容技術とトレーニング				4	
2.	理容用具 ・ 理容と用具 ・ 理容用具と衛生				4	
3.	理容用具 ・ 理容刃物 ・ シザーズ ・ レザー				4	
4.	理容用具 ・ クリッパー ・ コーム ・ ブラシ				4	
5.	理容用具 ・ ヘアアイロン ・ ヘアドライヤー ・ その他の器具				4	
6.	ヘアカッティング ・ ヘアカッティングを学ぶにあたって ・ 観測法				4	
7.	ヘアカッティング ・ 基本原則 ・ 一般的手順				4	
8.	ヘアカッティング ・ スタンダードヘアの概要 ・ 用具の持ち方と操作				4	
9.	ヘアカッティング ・ スタンダードヘアのカット技法				4	
10.	ヘアカッティング ・ スタンダードヘアのスタイル別カットシステム				4	
11.	ヘアカッティング ・ デザインヘア				4	
12.	ヘアカッティング ・ デザインヘアのスタイル別カットシステム				4	
13.	ヘアカッティングを主体にフォローアップ（国家試験対策）				11	
14.	ヘアカッティング ・ デザインヘアカットの一例 ・ レディースカットの一例				4	
15.	ヘアセッティングを主体にフォローアップ（国家試験対策）				10	
16.	ヘアカラーリング ・ ヘアカラーの歴史・色相の原理				4	
17.	ヘアカラーリング ・ 染毛剤の種類と原理 ・ 安全性と取り扱い上の注意				4	

18.	ヘアカラーリング ・技術のプロセス ・おしゃれ染め、白髪染めの一例	4
19.	シェービング ・シェービングを学ぶにあたって	4
20.	シェービング ・シェービングの要件 ・基本技術と要領 ・プロセス	4
21.	シェービング ・メンズフェイスシェービング ・メンズネックシェービング	4
22.	シェービング ・グルーミング ・レディースシェービング	4
23.	シェービングを主体にフォローアップ（国家試験対策）	11
24.	理容マッサージ ・マッサージの意義と効果 ・マニピュレーション	4
25.	理容マッサージ ・ヘッドマッサージの一例 ・クリニックマッサージの一例	4

評価の3観点とウエイト

1. 知識・理解 （定期試験、授業内テスト）	2. 関心・意欲・態度 （課題提出など）	3. 出席状況 （受講意欲、思考と演習など）
ウエイト 1.5	ウエイト 1	ウエイト 1

授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）

教科書を授業計画に従って授業前に読んでおくこと。
授業後はワークブック（問題集）を活用し、確実に学習する習慣をつけて欲しい。

使用テキスト

書籍名	出版社
理容技術理論①	公益社団法人日本理容美容教育センター
理容技術理論②	公益社団法人日本理容美容教育センター
美容実習Ⅱ	公益社団法人日本理容美容教育センター
ワークブック	公益社団法人日本理容美容教育センター

参考書又は参考資料等

授業中に適宜、その他の資料を配布する。

そ の 他（生徒への要望等）

- ① 国家試験に合格できる知識を確実に習得してほしい。
- ② 「理論的に思考して技術練習を行う」ことで、個々の技術を早く習得することに役立てて欲しい。
- ③ この技術理論を確実に身に着けて、理容技術を発展的に実践できるようになって欲しい。

授 科 目 業 名	理容実習				
担 教 員 当 名	向井美香 後藤廣一朗 原田彩花	学 年	1	単 位 数	23
開 講 時 期	通 年	必 修 ・ 選 択	必 修	授 業 区 分	実 習
実 務 経 験	向井美香・後藤廣一朗・原田彩花（理容所において理容師として勤務）				
授 業 の 概 要	教科書は日本理容美容センター出版の「理容実習ⅠⅡ」及び「理容技術理論ⅠⅡ」を使用する。 理容師国家試験を必ず合格する技術力、理容師としてのスキルに必要な知識を1年次の理容実習を活かしながら習得するものである。				
授 業 の 到 達 目 標	理容師国家試験に合格できる技術について習得する。そして就職してからの理容師としての1年次以上の技術の習得を目指す。				
授 業 計 画					コマ数
1	ミディアムスタイル① 基礎刈				135
13	シャンプー・シェービング				30
14	ミディアムスタイル② 基礎刈から指間刈まで				100
15	ミディアムスタイル③ 逆櫛、襟付け、仕上げ刈り、				45
16	ミディアムスタイル④ セニング、整髪、				15
17	国家試験練習① シェービングと顔面処置				100
18	国家試験練習② カットング及び整髪				100
19	国家試験練習③ 実技と衛生の総括				165
評価の3観点とウエイト					
1. 知識・理解 (定期試験, 授業内テスト)		2. 関心・意欲・態度 (課題提出など)		3. 出席状況 (受講意欲、思考と演習など)	
ウエイト 1		ウエイト 1		ウエイト 1	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）					
教科書を授業計画に従って授業前に読んでおくこと。 授業後は教科書を活用し、確実に技術を身につけて欲しい。					

使用テキスト	
書籍名	出版社
理容技術理論Ⅰ	公益社団法人日本理容美容教育センター
理容技術理論Ⅱ	公益社団法人日本理容美容教育センター
理容実習Ⅰ	公益社団法人日本理容美容教育センター
理容実習Ⅱ	公益社団法人日本理容美容教育センター
参考書又は参考資料等	
授業中に適宜、その他の資料を配布する。	
そ の 他（学生への要望等）	
① 国家試験に合格できる知識を確実に習得して欲しい。 ② 反復練習を行うことで、個々の技術を早く習得し、また技術の幅も広げて欲しい。 ③ この技術を確実に身に付けて、理容技術を発展的に実践できるようになって欲しい。	

授 科 目 業 名	スキルアップ				
担 当 員 名	後藤廣一朗 向井美香	学 年	1	単 位 数	7
開 講 時 期	通 年	必 修 ・ 選 択	選 択	授 業 区 分	演 習
実 務 経 験	後藤廣一朗・向井美香（理容所において理容師として勤務）				
授 業 の 概 要	本授業は、理容実習で身につけた技術を、さらに熟練したレベルへ導くものである。				
授 業 の 到 達 目 標	理容の基礎技術が網羅されたスタンダードヘアについてより深く追求していく。 ミディアムカット・ドライヤー仕上げを、他者に解説し実演できるレベルが目標。				
授 業 計 画					コマ数
1.	カット技術の確度向上（姿勢と技術） 準備、立ち位置、目線の位置、観察法（事前観察・事後観察）				7
2.	ミディアムヘア（中髪型）の構成要件と実際 分髪方法、毛髪の弾力と重み、髪質、髪量、頭の形、顔の形、				7
3.	ミディアムヘア（中髪型）の構成要件と実際 クリッパーライン、接合線、毛流（分髪、前額髪際、髪際隅部、側頭部）				7
4.	カット技術の確度向上（櫛、鋏、クリッパーの操作と運行） 基準剪髪、斜行運行・斜行剪髪、				21
5.	カット技術の確度向上（基礎刈） 直上線剪髪、直線剪髪、固定刈、すくい刈、連続刈、押し刈、指間刈、				21
6.	カット技術の確度向上（仕上げ刈） 線とぼかし、線と面、回し刈り、両手直鋏、片手直鋏、梳き刈、襟鋏、				21
7.	カット技術の確度向上（梳き刈） セニング技法、毛量調整、質感調整、毛髪の立ち上げへの応用、				14
8.	ドライヤー技術 水分量、熱量、風量、ブラシワークの原理と実際				7
9.	ドライヤー技術 面を作る（根本の矯正、高く、低く、接合部処理）				21
10.	ドライヤー技術 同じ平面で毛の流れを作る				21
11.	ドライヤー技術 整髪技術（整髪料の塗布、ブラッシング、コーミング等）				21
12.	ドライヤー技術 規定時間10分での反復練習				14
13.	カット15分、セニング5分、ドライヤー10分、整髪5分				21
14.	全体を通しての総合技術レベルの確認				7

評価の3観点とウエイト		
1. 知識・理解 (定期試験, 授業内テスト)	2. 関心・意欲・態度 (課題提出など)	3. 出席状況 (受講意欲、思考と演習など)
ウエイト 1.5	ウエイト 1	ウエイト 1
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）		
授業で学んだ技術を反復練習し、着実な技術習得に努めること。		
使用テキスト		
書籍名	出版社	
理容技術理論1	公益社団法人日本理容美容教育センター	
理容実習1	公益社団法人日本理容美容教育センター	
参考書又は参考資料等		
授業中に適宜、その他資料を配布する。		
そ の 他（生徒への要望等）		
この教科科目は理容実習で学んだ技術を基本に、より高い技術力を身につけるものである。よって高い技術を探求していく強い気持ちが必要である。今現在の技術レベルに満足することなく研鑽して欲しい。		

授 科 目	業 名	ネイル				
担 教 員 名	船川桃華	学 年	1	単 位 数	7	
開 講 時 期	通年	必 修 ・ 選 択	選 択	授 業 区 分	演 習	
実 務 経 験	船川桃華（実務経験なし）					
授 業 の 概 要	日本ネイリスト協会発行のテキストを用いて検定試験2級に合格できる技術と知識の習得を行う。					
授 業 の 到 達 目 標	日本ネイリスト検定2級取得を目標に、プロとしてのネイルケアの技術を修得する。また、サロンワーク、及び技術競技大会で通用するアート技術を磨く。					
授 業 計 画					コ マ 数	
1.	2級検定に求められるネイルケア技術				56	
2.	検定のテーマに沿ったアート作成				14	
3.	大会レベルのアート作成				14	
4.	爪の補強、修復技術				14	
5.	チップ&ラップの正しい装着方法				42	
6.	2級検定技術の規定時間での練習				56	
7.	1級検定レベルの技術工程				14	
評 価 の 3 観 点 と ウ エ ィ ト						
1. 知識・理解 (定期試験, 授業内テスト)		2. 関心・意欲・態度 (課題提出など)		3. 出席状況 (受講意欲、思考と演習など)		
ウ エ ィ ト 1		ウ エ ィ ト 1.5		ウ エ ィ ト 1		
授 業 外 で 行 う べ き 学 習 (準 備 学 習 ・ 事 後 学 習 等)						
授 業 で 学 ん だ 技 術 を 反 復 練 習 し 、 着 実 な 技 術 習 得 に 努 め る こ と。						
使 用 テ キ ス ト						
書 籍 名			出 版 社			
JNAテクニカルシステム ベーシック			NPO法人 日本ネイリスト協会			
JNAテクニカルシステム ジェルネイル			NPO法人 日本ネイリスト協会			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等						
そ の 他 、 授 業 中 に 適 宜 、 資 料 を 配 布 す る。						

そ の 他（生徒への要望等）

卒業後には、即実践できるようプロテクニクを学ぶ教科科目である。
プロに求められる技術指導を行っていくため、技術レベルの要求だけでなく、立ち振る舞いについても指導するので、プロ意識を持って学んでほしい。

授 科 目	業 名	エステティック				
担 教 員	名 当 名	池田薫	学 年	1	単 位 数	7
開 講 時 期	通 年	必修・選択	選 択	授 業 区 分	演 習	
実務経験	池田薫（実務経験なし）					
授業の概要	身体組織や器官の活動を助け身体内部の生理機能に働きかけることで新陳代謝を促し美しく健康的な状態をつくりだすさまざまな技術を理解、実践していく。					
授業の到達目標	デコルテ（胸板）の筋肉や僧帽筋への施術により血液供給、物質代謝を促進させ、離れたところからはたらきかけがフェイシャルケアの効果をさらに向上させることを実践し理解する。					
授 業 計 画					コマ数	
1.	有酸素運動・筋肉トレーニング・ストレッチングについて				14	
2.	ボディマッサージのポイント手技・デモ				14	
3.	相モデル 背中でのマッサージにおける手の動きとポイント				28	
4.	背中から首の軽擦・背筋の深めの軽擦				28	
5.	背中から首全体の重手掌揉擦・背筋から肩甲骨まわりの手拳揉擦				28	
6.	肩甲骨から僧帽筋の母指揉擦・首の牽引				28	
7.	デコルテ全体の軽擦・肩の圧迫と僧帽筋へのつなぎ				28	
8.	デコルテと僧帽筋の手拳・僧帽筋の圧迫法				14	
9.	肩から僧帽筋へのらせん軽擦とつなぎ				14	
10.	首の重手掌軽擦・デコルテと肩全体の軽擦				14	
評価の3観点とウエイト						
1. 知識・理解 （定期試験, 授業内テスト）		2. 関心・意欲・態度 （課題提出など）		3. 出席状況 （受講意欲、思考と演習など）		
ウエイト 1.5		ウエイト 1		ウエイト 1		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）						
施術前に、テキストで手技手順を確認。						

使用テキスト

書籍名

出版社

授業中に適時資料を配布する。市販テキストは使用しない。

参考書又は参考資料等

授業中に適宜、その他の資料を配布する。

そ の 他（生徒への要望等）

意識せずに自然に手技ができるところまで習熟して欲しい。